

## 1 木二回定期会議演習書より

私たちの基本的任務と二つの柱

はじめに

私たちも、剣道活動を豊かな趣味的なるものに終らざりありませんし、花城鎌京の……個人的……サヨン的本……もうまいた剣道であつてはならぬと思ひます。まだどう思つた剣道が發展したなどと云うことを前にしたことはありませんし、実際どもの内が、反対に何時の場合でも、どいでくられても、必ず駄目となる方、または走り出る可能性あれども、実際にには平均二年でメニバー交代として、何かの拍子で消えて行つてしむるが現状です。

剣道から「かせの十年」後もまた、もう五つ十年を経たところまであるべきのでしょう。その原因は多岐あります。が一言大さな、重要な点は「演習は好きだからやう」と云ふことから一步も歩み出る「とがをかうだ」と云

## 私たちの基本的任務

——いま私たちよりまして「文化状况は極度地獄を異文化のはんらんの中にある」と云ふので——

我々は映画にみられる日本國中まるで「機械化」の感、スリラーと殺人の横行する「テレビ」、卑俗な放送、「セミナ作品・ジャズとスリル」とズボーン。「翌日」の母」原著者にみられる體育部長。「がとり」子の放送中止や「いちらねお嬢」の放送の中断が公然と作らわれておりそれが今年の十月から「立衛隊物語」が始まろうとしている。日本人にとって忘れることの出来ない三池翠原の「田舎の娘」も、立衛隊の娘も「立衛隊物語」が始まることなど公正なんではありませんが、とんでいる現実。国会では紀元節復活が叫びされ、立衛隊とサークル活動の統制に危機あるのが既成。開場でのサーキュリに対するアガ攻撃や警察の自決反立衛隊へのスピーチとテツ。スシダメ収容室に差別改善に強制ラスト、或は大学管理處、自衛隊の学級での説明会も映画会、小中学生の一日入眠や自衛隊への若者、私たちの演劇運動に見られる、美術美術への不景氣などはじらとする強烈のあの手、この手。向生劇場の問題、劇団「夢四」をはじめとする劇團への分裂工作、三島

興味 (一九六〇・七・十八・十九)

うきとを尋ねておられた。一日の剪脚を見て、くだぐたになつた体をかきすり、稽古場に移り、稽古が一時と二から三時間の少くして演習活動の準備は何か……。劇団は時々ハジケ度を定めて来る、樂はこのこと意味いかにしようと云つて論争を繰り返しましたし、現在私苦が暗うかにしそうとしている。「演習を行なうものの責任とは」「演習を強引ためにいかに創り立めるか」と云ふ是足當からしてはどの程度高まつたと云ふのでしよう、今日私苦は演習運動をめしまさめて行くたまには、何がどうなのかも、何がどうにしなければならないかを明らかにしつつあります

查年にとて云ふば々人をせよとして、踏みつけにす

る人間が、つヨリ生れ故郷に打ち附く者等を人間が  
よりよい人間とされており、人間不信に青年を落ち込

らせ、青年は大おしく、かたじ灰色の毎日をあくつ  
てゐる。因的のない自らのために獨創的を及ぼしの気分  
は全くない。また本当に人間らしい想つた心地で等  
わざりようとしている。左だまは一部の業種のドラバ半  
と浮けたる人間だけではなく、むろ働く者等の全小に  
抱しきれてゐるのである。私たちは知らずく  
のうちに自分の頭髪ががさとられ、心肺がもどりうれ  
ている。また大人達は未だ余観されまして、あきら  
めの中に沈没してい

こうした時代絶望感を、實にあり難いを割り戻力よう  
としている見たまにとて無視することは出来ない。  
また胸うちも、「こんなに悲しく、さびしく、苦しく、  
不愉快な毎日でも、それたあしつぶされはしない」。  
私たちは演劇藝術としての責任と歸りをさう、私た  
ちの祖国をさづづり、私たち日本人を苦しめていたる根  
印は生れである

私たちの生活、そのきびしい現実のなかで人々は一律  
角を意識するのを國外の声を口にすることが出来ず。  
語ども友達をなく、手ととりぬくとの事が起らうま、  
希望を失っている若者が商店ヒ・工場になどと多いこと  
か。そして「何とぞしなければ」と思つていてもどう  
たらよいかわからまいでござ若者がどこに居る

私たちは秘密自然、渋滞する娛樂の場所などとて、一院  
の水しみの湯所としてではなく、それをもれなく見えて  
いたる悲しみ、さびしさ、苦しみなど、さあさまを問題の  
解明と打開の方向を進めていることを、<sup>1</sup>神醫圖<sup>2</sup>の公  
演と批評とに集まつた五十名の人達の筆で知ることが出来  
る。觀客が私たちの劇団から、かせき、おれたうの劇  
団と呼んでくれる人々に聞くかこられた時、劇団は本当に  
演の聲のままでいい。アーティストの劇団と呼んで  
くれる人々、その人々の多くは今のこところ  
うと神醫の劇団しか觀ない程だ(?)。口下手だし何ん  
事もよくないのですが、本ものとニセものとの辨別につ

繩をつきとめ、東の洋物を翻訳するが、  
よその國に占領されて支那風が走っている國に決して人間の  
しゃわせはない。

「日韓合謀」などどよその國に進出しようとする國に  
決して私たちの豊かな今日と美しい未来は保障されでは  
いかない。民主主義はない。私たちは眞理藝術家は志前輩  
の責任として人間の幸福と進歩を主の使命とする。中尾  
に私たちは現在、アメリカ帝國主義と日本の反動勢力  
が私たちの愛する、真しく愛かな國、祖国日本の尊厳、  
立派にヒリ、独立をあがし、金土被重視化、合理化の  
際、価値論と美術、高物価、重税などにみな生活を本  
しつけてくるその事實に因をかくして演劇を行なうこと  
は出来ない。私たちは日本のかく仲間の立派でしているこ  
の職業をねいのけ、美しハ祖國の上に、誠實と民主、平  
和を築かなければならぬ。大きハ勢も小さい勢もある  
うが、國民の尖端の要求は國の独立と平和と民主であり  
独立と平和と民主の日本はまだ歴史の将来でもあり、  
老夫は後進者に演劇を武器としてやうのは私たちの基本

では何事かのそとから申味があるてる歴のすゑとぞ思ひ、  
であり、何より要求することによつて望むるのを國に  
創設よと云う積極性にあふるが、矢張り、名譽共通  
してゐるようですが、この要求は私たちの神然日の批評<sup>3</sup>  
の中に提出せたと見えよ。今日汝様にめぐ仲間の文化  
その要求は劇団からかせきをして來ている。私たち  
がオルクに行くことをなかつたとき、全國的を第一回ルル  
は「からかせき」の公演にして、採用第一回全部を使い、  
からかせきを連接してゐる。私たちは、「のんたちにけ  
して言えとはならぬ」。そして、それらの要求に、声  
に忠實に身をかたむけ、自分の脚本だけの演出が四十甲  
も早く板ば切られ、脚本は脚本には思ひます、あらゆる  
人々と対話に結びつき、互に批判「批評」、審議、主張や  
サークル主義を宣傳し、政治に懐くものか、竹久の  
の文才論としての脚本不うかせを講義させたう

今日、企画の外の未來を手本のほ身にかかへ

私たちは劇場で、それらの人々と一緒に今日を度光、  
明日を切り出して行つう。私たちは夢の「初恋」を植

くのではなしに、次第に生活しさびしなってしる、私

んでしる、苦しいでいる、とのはども「る人間の感覚を

かとしよう、演劇の、脚本、を語りうる。

私たちは、自分自身、人々を笑える力、この著者

た不思議な體験を経験を運営を蒙る。

私たちは研究者の演劇、アリスティック演劇を監督する。

私たちが演劇を行なうとする、そろそそふ

いとする心地、私たちに心すやすへ来る。しかし、私たち

が正しく多くの人々の支援があるほど、その力は彼らの持つ轟きと、あらゆる手段を駆使して私たちに競争に集中し優勝して来る。「が」、アメリカ帝国主義とそれにくつついている日本の政治家は今日、色々をたてて結果をうどこじる。彼らがひの士うな勝利を、私たちに対する集中してこよぶるが、勝利とは出来ない。そして芸術としての強烈な興味を自己に隠す、運営をやめたり、げたかいを極とだり怠慢と、全ての戦争の終焉と共に祖国をはがすものに対する、今こそ純

じ因縁してまつとがちう、用刑して演説」といふ。私たちの基本的任務は實物と藝術家の立場を守り、其の行さう立場から敵に對して斗うことだ。

劇団「櫻痴」の運営を切りぬかねば。

私たちは、今日私たちの演劇藝術の才華をいかが運び發展をやることが出来る。!!

劇団から「櫻痴」の未来は薄く未來、私たちの明日は闇が揮発けたうん「人災」しい!!

## 七つの柱

### 第一の柱 つべの

涙をもって観客が座席のまわりに乗組り、私たちが彼ら、彼らに抜きがたし影響を及ぼし、その人々の情けたよて新しい演劇を創り出してゆく姿勢は、他くもの立場で、他くもの生活感覚への自己のさばしい危険を覺えり上、どう云ふ豪傑は生まれ出

る。『さき』では、他くものと並べてしても、争ひの意味があつて創造ではない。脚本、演出、などに限らずことは豊富のもの、立場でもなく、責任のなさの意味をあうわれである。

私たちが創造の向上と同時に手は争なる技術の磨練であつてはならない、創造の向上は創造の人間、つまり生き生きと躍動する脚本、脚本と脚本とされ

て技術の磨鍊はどうしても要求せられるのであり、さ

## が出来るのである

「私たちが演して、うわううだりの、手の上の演劇を創つてはあらまじい、觀客に正体として求められた時、ううたえどもううが聲の演劇創りがあつてはまらない。私たちは、どう云々を見方で一切のアマチコアリスティック化しきむしげか、とうといふあれの演劇を創りだや」

第二の柱 ひろがる=ひろげる力は、創る力である。

私たちの演劇の前に外側に向って広がられるものが、

であり、「

「竹千代」をするのであり、そこであたまされるのであり、私たちの演劇感覚のものであり、觀客とともに「創り出めるものである、劇団は劇のことと云ふことを劇団の土台とする。

劇団は育てる力は創りであるとして、劇団のま

リに劇団のエカリに觀客を組織する。つまり普段

を中心として、人々の会・を組織する。

創始者は白人を主とする力であり、人を育む力であり、よりよい社会を創る力である。創始者は演説者をもつて活動を行つくる。創始者はあらゆるアーティストや教師がくみあげ、とどける。

創始は私たちの創始であり、創始なることをもつて開創した。現在、タダラバ外語へ。

北田の社、まただ。

私たちは、私たちの演説会社の上級をあげる定期演説會「自己に導く」、ひとりひとりの、全国のものにするが、要が立ちしもある。次で個別には他の生活の中、演説会をさき、生活の感情を運営する。また創始は定期会を開催するための

北田の社、たたかう

定期の要がである國の創始と同様に毎年は、定期会開催まつ社となる要があり、それを優先しての演説會を開催としておこなうのは当然であり、また定期の二つしたうに私たちは積極的に参加し、演説に反響・統一する。

## 2. 東リ演説会総会記録資料（1948.8.30）

新」「前進のために」

一九六三年八月二十五日東リ演説会総会とされて満五年、早くも二年目を迎えようとしています。当初私たちは東リ演説会総会とのように複数し判りでもらうか色々考へました。受け取る側には複数を各自の専門や、組織や、その組織行動を危ぶむ声もなかつたわけではあります。私たちは純粋なと理解され難い時もござりますが、今もその本意を大体において明らかにあります。これがさうしたのではなくと思します。東リ演説会の必要性は、二年経た現在、始めには一層もやさなかつたテンポで、大きさを發展を積めている事実によつても明らかになつたばかりをみて、東リ演説会既に筋をうにほぐれて其ならじ演説会の母胎と見ていいことに察付くのです。けれども私たちは決してそれで満足している訳ではありません。この二年間で東リ演説会に与えられた母胎、果て、ねばならない演説が明らかにされば明らかであるほど、私たちの目的意識的活動の強さ、力の入れの不充分さを感じます。私たちは今日までの結果のままの現在であります。私たちは今日までの結果のままの現在であります。

上にたつて改めて「母胎のままのまま」、熟しく大型にて行すべきことはやめしなければなりません。  
東リ演説会を前にした時の感想が述べられており、統一して、個別に、社会主義運動、國際主義運動、國際民主、労働者の以前に一定の困難を経験が生れ、各個人民が、自分に不満感を抱いてゐています。そのためかわからぬままのままのままでは、各個人民の改革、平和、民主主義、社会主義の斗争は、必ずしも演説会の母胎と見ていいことには付くのです。日本総合演説印紙の南朝鮮、ペルシキの世界平和大会にも端的に現われて居ります。国内的には參議院選挙が、選舉権を擴張するの勝利、原水禁大會の成功矯正にアメリカ帝國主義と共に併属する日本は既にとて不理にか

勢の社 まじわる  
互いの批判と援助と補完は互にたるところから出発する。それに加えてこのない演説會は東の演説會であるとは云ふまい。創始は地方に根ざしてつ全国的なつながりの中で發展する、との為東日本アリヤハナ、創始場に加盟し、全國の同じ過程を経て多くの演説會が誕生する。然るに多く人々とまじわりをもつて行きません。然るに多く人々とまじわりをもつて行きません。

統一と国際の連絡は創始組織の基礎のものであり、大つの社の基本である。創始は全國的に東リ演説會と西リ演説會と並んで、北地区には東リ演説會と山陽地区條友連盟とある。また、東京のあつゆきの人々、あらゆる政治団體と手をもすがたはる。とりかづ、政治の竹くるもの連絡会と手をもすがたはる。とりかづ、政治を行なわなければならぬ。

七つの社のアーティストの行動をなす演説に付くことま

たうどつて、いき日本人民は、とつて有利に進行してゐる  
のである。東リ演においても、何時諸團の盛況は特に「  
都上」の五音社「演」の成功が大いに興味ある原因は、東  
リ演の主役である労働者階級を意識した諸階層を分  
野の全人民の生活態と、いに象徴しながら、常にそれら  
の生い立ち統一し創造させる立場に立ち、それらの努力や  
底盤を人民創造の原氣として、オットを天から外なり  
ません。そして現在の階層勢を常に正しく把握して、人  
民の利益と深く連絡しておいて、東リ演の存在理由  
があることを確認し、第「音楽創造の道の向こうと發展  
として運動團の中心にすえ洋が続けて行くことを「初  
心たるやからずし、西日本年度の出発に当り確認して  
うではあります。

今後益々本日支配層の政策と協略、資本と反動、人民  
生活破壊の政策の下で、これに反対する人民衆の不満  
と不平は、そろ拡大しほげしくなるでしょう。新宿保  
改計の一九六〇年から、協定の期間七〇年の丁度半ば  
である一九六五年は、正に本日支配に対する人民の大  
がね年だ。

われわれは今日までそれを水の湯で、平和と民主主義  
と國の独立を求める國民の手と結びつきながら  
演劇創造と藝術の活動を止めさせてました。傍づく観客  
ああわざの想いは、なしくすくに死しづまれ反故にされ  
がねます。

われわれは今日までそれを水の湯で、平和と民主主義  
と國の独立を求める國民の手と結びつきながら  
在結託が強化している技術は、ますます露骨な危険をも  
のにあり、このままでは、十八年前に始んだ、再び戦  
争の被害者にもまして加害者とも歸じてあるまいとした  
ああわざの想いは、なしくすくに死しづまれ反故にされ  
がねます。

かねます。

いふ、新しい経験に入ることを具体的な試み、活用  
しません。

日本人民が安保の斗争で示した偉大なる統一行動は、  
現時点において、更につれまわるようすを歴史的背景と考  
えて、タトこと運動たる場面の生い立ちをして、肌からこ  
ヒシを感じますし、中企企をも含む大な統一運動、  
民族民主統一戦線戦線をつくりあげる宿題的条件はます  
ます強められることを確信せざるを得ません。

私たちは、この機会を最大限に利用して、それを元の地  
点を重んじ、創造と普及を更に向上させます。東リ  
演が果たねばならない社会的要請に応えるために次かよ  
うを提案を致します

### 3. 附録（東リ演より）

#### 1. 東日本アリヤドム演劇公演結成のことは

八月二四・二十五日、東京に集まつたわれわれは、全

体の意志で東日本アリヤドム演劇公演を結成しました。

われわれは現実にたち回つて直面する現実を解決する演劇  
芸術として、いま想望を燃つて、あるきびしい状況がり  
た。

われわれは東洋の目標を明らかにし、創造的なよき  
になる演劇アリヤドムの思想と方法を採用し、國内にと  
つて必要強調をすると豊かな舞台藝術を生み、アリヤドム  
が、この結果であると思ひます。

互に交流し合い、学びあい、経験を交換に商ひ、さ  
うに実践をたしかめ合うの活動のゆからう。現在急を務  
めとし、被災文化のサナカルマ、それが基礎とした全  
國的運動の相輔をいたけてきます。

われわれの相撲の演劇への要求は、相撲とともに最も最大の  
ものであり、しかも日本と共に進んでいます。この要求に  
こたえ ciò こと本演劇公演の任務であるとともに、生甲斐  
そのものだとえます。

一東日本アリヤドム演劇公演は、それを丸の地表で開幕して  
いく。われわれの演劇文化が底を三輪的に展開して

に責任を負つて、民族民主的演劇の創造と普及のために、ねばりつよい仕事をすすめている仲間の集団が、「心中に加わって会話を大うせ力きつ上めてくれること」がうらやましく思えます。

われわれはこの結果をとおして、日本の演劇の未来像をひしひしたじょんとしてつかみ、壁裏と国民から支持され、れた夢想を任務を果たします

一九六三年八月二十五日

東日本アリバム演劇会員

(2) 基本方針

### 1. 総務部会での津田金報告・野村泰氏の講演・名劇

開幕、及びこれまでの討論は、いま私たちの演劇運動が当面している主要な問題をきくつきで反映せたのですが、その結果は私たちが國へ団結する一途の精神をもたらすとしている、という一筆にあるといふま

すべての報告が、東京演への意い圖を示し、基本的

な演劇をめざし、ただちに募りし御奉り条件の集団をやがてはがる事無く前史で、全場演者に義理的な立場をとつてくれたことから、この組織の目標が本道のものであるのを知ることができます。

私たちは国民に責任ある演劇活動の経験から、国際の立場をもつて自ら在地属性に偏位せらる思想をめし、豊富の蓄積一回総のためにこの組織を結集したのです。

### 2. 極端の基準による統一的理念

過去と普及の活動を、誰のためにもうかこむのが、是を跨の中で明らかにするがまた生み出します。野村泰講演中の、立場、觀象、方法の問題です。

津田金報告は現在の演劇状況、日本が才庸でないばかりでなく、アメリカに丸い席して熟睡しておらず、日本主導階級小剣組の令嬢たあすけさを痛感する。即ちすべての政策の安保体制化を強化し、原半力潛伏艦が港内爆撃にあらわれていちどに、日本の反共連帶基盤化、核兵器をもつていていいる現実との政治的対立の中、どうぞお心遣りを發揮していきます。

民族の独立と平和の歴史始まり以来の花柳に立ちたえていよう。我が国民は、支配権力の政治、経済、思想、文化全般の反動攻撃に立ち向かう。現状をヨリドラシ、諦めハ明日をよぶために奮鬥り難く斗つでしょ。

私たちには新しい日本の演劇運動をめぐる創始から運営と併せてきた、現状をヨリ進歩を發展的にうけていくが、一つの国民の立場・觀象を自身のそれとして受けとめます。

3. 私たちの演劇をめぐるアリバムを呼ぶものは、演劇の主動を創造の問題にするからに他なりません。木田反動が支那同様の攻撃に対して、演劇の立場ではなく、セミナの論理一方法としての演劇アリバムは、先づは根本でなく現状をヨリ進歩の立場としてとらえよう必要がある。アリバムが生まれたのもよほりません。

彼らは單り演に結集する地を、一切のアマテラスアリバムを否定し、勝利を敵の弱く演劇創造の専門者であることを演劇に限らず、全國の劇場力をもめる觀念す

る。演劇・劇場を想定、首領の劇による觀象の批判に準へ、いきいきと表現した劇団生活によってすぐれたファンサンブルをつくり出す必要がありります。

舞台創造の基本は、起碼脚が舞台の行動としては、リリードモチ、現状変革のバランスの思想が、演劇創作家たちの自己を革新として身体的につかまれると、ちからめり、技術の発展をここに求めあがめないと、技術の繋りが幹を見失わせる結果になります。

觀象の立場にてとまる本質的立場を、いかに大きく高めが至るか私たちも、創造に対する量的的、質的的など

りくみが、集団でもメンバーにも、まさにきびしい喜び

をもたらすとの極度をめざして自分を進むるがを要えます。

4. 新しい演劇が国民の手に渡るとして、新しく、高品質の觀象が創出のそれに対して顕著されること、それが歴史的・社会的・文化的・思想的向上を保証するなど、上、善戸の觀象が創出のそれに対して顕著されること、あります。高品質の觀象「これが創造の向上を保証する」といふに留まらず、そのエネルギーをもつあげる私たちの文

勝手上つてつらぬがえます。

昨日反動が國民の「身」をもつて「だすための武器である現状肯定一人國旗外一揆作成立の回復上進されたのは、私たちが銀河一国民との身をもつて、そこには國旗をつくつていいものかいかず

「勝手上つてつらぬが金利一戸あたり一人の親切を勤めして」ということの意味から「前」へ演説「たむれ連坐つてくちの親想は生まれて二なけねばならぬいがしよう。ふとにさりの演説を終ると新聞社説に下記して、演説の要約書がついているのは演説的には「口いじしかり」と。國元は私たちの演説を演説してより、私たちの言及演説は極めて僅かしかそれに応えていなかつてそれが私たちの打破すべが體です。

#### (3) 演説文化組織と演説文化組織

畢竟、県二とに核となつて、リアリズム演説の創出と普及上努め、開拓一國民とのがたし結合を縣に地域の文化状況に作用し、勞組 演説文化組織との運営の中で、地域方興味に富め、授業文化の民族性、異文化によって

方法をまさぐり、一つ一つ準備としていくところに、東洋演説の王座を競あがめのです。何故は私たちのチカセ足かせでなく、高い振舞のための運営にならべやすです。

現状は、一進歩の發展が私たち全体のクラスになり、

マイナスが井邊の憑寄として捉えうて西洋演説を演説を重視しています。創造によでくしも因習や既成が、これをすむをれのあるがよみを相互關係では、國民の發展にいたる組織たり得ません。東洋演説は、日本は創る發展をさせたための、回向の演説に走らされた結果得てあります。

#### (3) 想 約

オーラ 当会第2回「東日本リニア・リバム演説会」と共に結婚の趣旨において演説をあつたがことと同様とします。

オーラ 当会第2回日本(中華、大陸、東洋、東洋、東洋、東洋)

としての活動によりて、演説をあつたがことと同様とします。

主張する「政治的演説第一主義を宣傳説明させていく」その実現としての幾個要領がなければなりません。そこで、國の組織目標はオーラに私たちの集団をまとめて核にして、國の機とある集団の誕生と成長を推動することであり、オーラに集団の発展と強さと根柢を置き、「身を國に築く」でいいとがうどいえます。

「脚本劇團からサークルにいたる門へうる集団が、東洋演説に取組むとして、困難の状況を乗り越へるためには根つかの勇意を磨いていく必要感あります。これをどう座から提起され、脚本から脚本であり二体から老入まで含めてしての現状で、東洋演説の目標と「具体的にどうえらんだらいいのか」という問題をその一例です。根西リアリズムを標榜せながら、其脚本であれ、子供の芝居であれ、対象に応じた脚本劇場スタイルがあるのだからどういふ意をもとしましてしまえない具体的な脚本を、一語に表えきつていくのがないと、どう座にとつて東洋リテラは有効な組織にならぬだらうと感じます。実際に受けられた演説、相互批判の中で、其脚本の立場、脚本家、